

鈴木寛 社会の機能 としての スポーツ。

スポーツは、人間の生活に必要な不可欠なものではない。未来永劫「衣食住」以上の存在にはなれないだろう。しかし、世の中に存在した方がよいというのも事実である。スポーツは人間の精神的成長や協調性を育み、感動や興奮や悔恨や絶望や喜び……ありとあらゆる感情を内包する。「人間的ふれあい」が希薄化した現代にあっては、確実に「世の中に必要な機能」と化しているのである。スポーツをこよなく愛する政治家・鈴木寛が、政治という仕事の現場の日常から感じ取った「スポーツの存在意義」を綴る。

第四回 盟友・古田敦也氏の 引退に思うこと。

荒井直子 一構成
Composition by Naoko Arai

古田敦也氏が残した功績とは。
東京ヤクルトスワローズの選手兼任監督の古田敦也氏が、今限りでユニホームを脱ぎ、監督を辞任する。公私ともに親しくさせてもらっている友人として大変残念な気持ちではあるが、これからのスポーツ界を担う新世代のリーダーとして、今後の飛躍を期待したいと思う。

振り返ってみると、古田氏が残した功績の大きさに改めて気づかされる。大阪近鉄バファローズとオリックスブルーエーブの合併構想に始まった「球団再編問題」が起こった二〇〇四年、当時プロ野球選手会長だった彼の頑張りがなかったら、プロ野球はリーグ制一〇球団へと縮小し、おそらく現在は、リーグ制

八球団にまで衰退していたことだろう。あの一件の後のプロ野球は、五〇年ぶりに新球団が参入したり、セ・パ交流戦が行われるようになったり、衰退するどころか大きな盛り上がりを見せている。そのすべては古田さんのお陰だということ、私たちは決して忘れてはいけない。

球界再編問題を発端に、ゆるやかではあるものの、日本プロ野球界は改革を行うようになっていった。ジャイアンツ人気に胡坐をかき、改革の手を何もうたなかつたプロ野球界が、である。いま、これらの改革の成果は、とくにパ・リーグのほうで顕著に表れていると思う。なかでも、千葉ロッテマリーンズや北海道日本ハムファイターズといった、いまだに脇役的存在でしかなかった球団が、毎年、主役の座を交代しながら

盛り上げていることは大変興味深い。これらの現状を考えれば、古田さんはプロ野球の「中興の祖」といっても過言ではないと思う。政治の世界でいう「戦後レジーム」ではないが、プロ野球界の旧態依然とした状態、右肩下がりだったプロ野球人気を再生させることに成功したのだから。

プロ野球の盛り上がりは、ほかの世界にも影響を与える。実際に去年と今年の高校野球は近年にない盛り上がりを見た。注目度の高いプロ野球がきっかけすることは、その周辺にまで影響を及ぼすのだ。

古田さんというひとりの人間が命をかけて守ったものが、各方面に広がっていく。それは野球の世界だけに留まらず、スポーツ全体、そして社会全体の動きになっていくことを祈っている。

オーナー中心主義から、現場主義への脱却。

プロ野球界は、ジャイアンツや正力氏、ナベツネ氏を作ってきた歴史から脱却しつつあるといえる。プロ野球は現場と選手とファンが作っていくものだということを再認識し、それを貫いたことで、オーナー（所有者）中心主義から現場中心主義へ移行していったのだ。これは、ほかの分野でも見習うべき点が多い。

私は政治の仕事のなかで、医療や教育の問題を専門としているが、たとえば医療の現場ならば、日々患者と触れ合う医師や看護師、ベッドサイドという「現場」が一番大切であり、そこにスポットライトがあたるのが本来の姿である。そのことを忘れて、厚生労働省、日本医師会という権力者にばかり目が向けられていたからこそ医療現場は歯車が狂ってしまったのだ。

教育も、まったく同じである。文科省中心主義ではなく、子供と教師、保護者、地域の人など、現場の学

校コミュニティが大事なのだということ再認識しなければいけないはずだ。農業もまたしかり。農協や農協団体連合会ではなく、毎日畑に種をまいている人たちが、ほこりを持って頑張れるかどうかが大切なのである。

世の中を見渡してみると、旧態依然とした世界がいまだ多く残っていることがよくわかる。日本のスポーツのなかでもっとも影響力があり、さらに、ついこの間まで古い体質だったプロ野球界の再生は、教育、医療、農業など、これらの旧態依然とした世界にとっては大きな刺激となり、見本となるはずだ。

スポーツ、医療、教育といった分野は、文化や奉仕の要素が強く、通常の経営論理、経済論理だけでは測れないし、こうした現場の人々をお金だけでモチベートすることはできない。とはいえ、赤字を垂れ流し、つぶれてしまったら本来の目的を達成することはできない。

だからこそ、現場感覚と経営センスのバランスをうまくとって、いいチーム、病院、学校を作っていくことが重要だ。現場感覚と経営センスの二つの感覚がないと、どの分野でも成功することはないだろう。

これからのリーダーに、求められるもの。

現代は、スポーツという存在の重要性がますます高まっている。実際ニュースを見ると、日本人を元気にしてくれる話題のほとんどがスポーツだ。それにひきかえ、政治の世界は目を覆いたくなるような話ばかり。政治にかかわる人間として恥ずかしい限りだ。政治だけではない。会社も学校も不祥事ばかりだ。家族同士の悲惨な話も多い。そんななかで私たち日本人に希望を与えてくれるの唯一のものは、スポーツなのだ。

である。

では、なぜスポーツは魅力的なのか。プレイや勝負の面白さはもちろんある。しかし、それだけではない。スポーツには、世の中の大切なもの、何かを成すことの本質がすべて凝縮されている。勝ちも負けも含め、人間の努力の大切さと人智を超えたものが存在する。勝利の女神が存在し、それが誰に微笑むのか。その答えを求めて日々努力していれば、おのずと謙虚な気持ちになるし、誠実にもなる。

さらにスポーツには、日本の社会が忘れてしまったフェアの精神が変わらずに生き続けている。政治の世界とは違い、二世や三世であることは関係ない。本来当然であるべき「フェア」という感覚が、まともに残っている数少ない世界なのである。

古田さんは現役を引退するが、彼にはスポーツ界を引っ張る新しいリーダーの象徴となつてほしい。これからのリーダーは、現場感覚が重要になる。つまり、現場、フィールド感覚を持って引っ張っていきけるリーダーだ。そういう意味でも、ナベツネ氏が引っ張ってきたプロ野球界が、古田さんのようなプレイングマネージャー的人材に世代交代することは、自然な流れなのではないだろうか。

ほかのスポーツ界を見ても、この動きは顕著に表れている。たとえば、ラグビーの平尾誠二氏やサッカーの岡田武史氏だ。彼らはみな、プレイの感覚を持って現場で指導することができる貴重な人材だ。かつ、彼らには経営センスや知性もある。現場で素晴らしい実績を残し、かつ経営への知識と理解がある彼らは、まさにこれからのリーダー像の理想といえるだろう。

リーダーとして成功するために必要な



すずき・かん / 1964年兵庫県生まれ。82年灘中・高卒。86年東京大学法学部卒。同年通商産業省(当時)入省、電子政策課統括課長補佐などを歴任した後、99年慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部助教授に転身。2000年、平尾誠二氏(神戸製鋼所)らとNPO法人「SCIX」(シックス)を設立。01年参議院議員通常選挙に民主党公認で、東京選挙区から立候補。初当選。05年9月「次の内閣」の文部科学大臣に就任。07年再選。現在、参議院文教科学委員会委員、参議院政治倫理選挙制度委員会などを務める。

【目】